

ヒヨドリ 英: Brown-eared Bulbul 学: *Hypsypetes amaurotis*

1. 分類と形態

分類: スズメ目ヒヨドリ科

- 全長: 275mm (249-290mm)
- 自然翼長: 125.9±5.7mm (113.5-137.6, N=110)
- 尾長: 115.1±6.4mm (103.0-129.5, N=106)
- 全嘴峰長: 30.8±1.3mm (27.2-32.9, N=60)
- ふ蹠長: 22.9±1.3mm (19.1-31.3, N=105)
- 体重: 79.9±12.1g (54.0-110.0, N=111)

※全長は榎本(1941)による。それ以外は、著者らによるつくば市での計測(平均±SD)だが、繁殖個体と越冬個体が混じっている。また、雄よりも雌のほうがやや小型であるが、個体変異や地域変異が大きく明確に区別できない。

羽色: 雌雄同色で頭から背は灰色、羽と尾は灰褐色、赤褐色の耳羽が目立つ。胸から腹にかけて灰褐色の縦斑がある。北の個体ほど羽色が淡色に、南の個体ほど褐色が濃くなる傾向がある。特に亜種ヒヨドリと亜種ハシブトヒヨドリの胸は灰色なのに対し、それ以外の亜種では暗褐色であり区別が可能である(斉藤 2002)。

写真1. さくらんぼを食べるヒヨドリ。



2. 分布と生息環境

分布:

国外ではサハリン、朝鮮半島南部、台湾、フィリピン北部に分布する。日本には8亜種が分布し、北海道・本州・四国・九州・対馬・大隅諸島・伊豆諸島、屋久島、種子島などに亜種ヒヨドリ、小笠原諸島に亜種オガサワラヒヨドリ、火山列島に亜種ハシブトヒヨドリ、大東諸島に亜種ダイトウヒヨドリ、奄美諸島にアマミヒヨドリ、沖縄諸島・宮古諸島に亜種リュウキュウヒヨドリ、与那国島以外の八重山諸島に亜種イシガキヒヨドリ、与那国島に亜種タイワンヒヨドリが分布する。ただしこれらの亜種に関しては、再検討が強く望まれている(日本鳥学会 2000)。

生息環境:

平野からかなり標高の高い山地まで生息し、林だけでなく農耕地や市街地など木のある様々な環境に生息する。かつては市街地では冬鳥であったが、東京では1968年頃から春になっても市街地に留まるようになり、1980年代には東京の都心部全域で繁殖するようになった(唐沢 1997)。



写真2. アマミヒヨドリ。

3. 生活史

繁殖システム:

繁殖期は5-9月と長く、一夫一妻で繁殖し、同一ペアが1繁殖期に3回繁殖した記録もあるが、捕食などによる繁殖失敗のための繰り返し繁殖が多く、繁殖が成功するのは7月以降であることが多い(図1)。

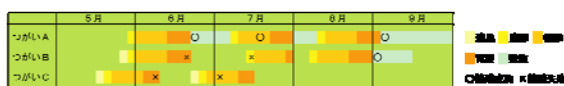


図1. ヒヨドリの繁殖パターン。つがいAは極めて稀な例。つがいB, Cが最も多いパターン。(掃部1995, 田中2000より作図)

巣: 巣は腕型、葉のよく繁った樹木の枝分かれしたところに乗せるように、地上1-5mの高さにつくる。巣材は外装に小枝やツタ、内装に草の細い茎や細根を使う。市街地の巣ではほぼ全てビニール紐が外装に使われている。内径6-10cm、深さ3-6cmでヒヨドリの体サイズの割には小さな巣である。

卵: 一腹卵数はほぼ4卵(羽田・小林 1967, 掃部 1995)。卵は淡い紫褐色地に褐色の斑点がある。長径約3cm、短径約2cm。



写真3. ヒヨドリの卵。

抱卵期間・育雛期間・巣立ち率:

抱卵期間は12-14日で主に雌のみが行い、育雛は雌雄で行う。ヒナは羽が生えそろう前の孵化後約10日で巣立つが、上手に飛べないので数日は巣の近くに居る。その後も1-2ヶ月は親の世話を受ける(羽田・小林 1967, 掃部 1995)。つくば市での10つがいの観察では1つがいあたり年に平均2.3回繁殖を試み、全体では23回中11回成功し、10つがい中8つがい雛を巣立たせた。繁殖失敗の原因はほとんどが捕食によるものであった(掃部 1995, 田中 2000)。

渡り: 島に棲む亜種は留鳥だが、亜種ヒヨドリは渡りを行い、年によっては冬期に奄美大島や沖縄本島まで移動する。いくつかの場所で100羽から時には数百羽を越すような群れになって海を渡っていくところが観察されているほか、日本全国で数羽から数十羽程度の群れで渡って行く姿が観察されている。

4. 食性

ヒヨドリの食性は多岐に渡り、果実、花蜜、花卉、葉、新芽といった植物食のものから、爬虫類、昆虫、クモ、カタツムリといった動物食、さらに人の与えるパンも食べる。茨城県つくば市でヒヨドリが採食していた植物は木本では32科74種、草本では7科8種、農作物では6科12種におよぶ(山口 2004)。主に液果(ベリー)を好むが乾果も採食し、ありとあらゆる種類の木の実を食べていると言ってよい。また冬期にはコマツナやキャベツなどの葉菜類も食害する。春から夏にかけては昆虫類が多く出てくるため、動物食を食べる割合が増え、セミなどを追いかけて回す姿をよくみかける。ヒナには動物食を多く与える。

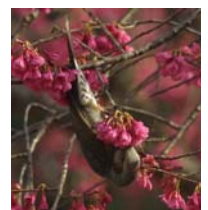


写真4. 寒緋桜で吸蜜するヒヨドリ。

5. 興味深い生態や行動、保護上の課題

● 留鳥? 漂鳥? 冬鳥?

ヒヨドリはよく鳴き目立つ鳥であるため、センサスによる個体数推定がしやすい種である。つくば市でのラインセンサスによるヒヨドリ個体数の1年間の個体数変動を図2に示す。

秋と春の渡りの時期には上空を通過していくヒヨドリが観察されるが、それを別にする、春から夏にかけては約20羽程度が安定して生息していると考えられる。夏に個体数が減少するが、これは換羽の時期なので林の中などで静かに

生態図鑑

しているためだと考えられる。その後徐々に個体数が増加していき、年明け頃に最大となる。これら増加した個体は北から来た移入個体と考えられ、基本的に春まで調査地にとどまる。秋の大きなピークは木の実を集団で採食しているところを観察したものである。木の実の消失とともに個体数は減少するが、これは周辺地域からヒヨドリがいなくなったのではなく、調査範囲外の畑などで採食することが多くなったためである。2月から3月にかけてのピークはコマツナ畑で採食していた集団であり、ときには100羽を超えることもある。4月にはサクラ並木で多くの個体が採食し、その後、調査地からヒヨドリが減少し留鳥個体のみとなる。

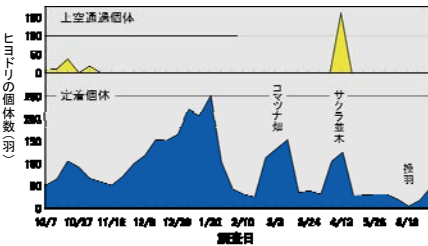


図2. 茨城県つくば市におけるヒヨドリの1年間の個体数変動。上段が通過個体、下段が定着個体を示す。(山口2005より)

つくば市で個体識別をして追跡した結果からも、1年中調査地に生息する個体と冬の期間のみ生息する個体の両方が確認された。つまり、つくば市では留鳥、通過、冬鳥の3タイプのヒヨドリが存在することになる。また、木の実の消失とともに長距離移動することも分かっており、大阪で12月に捕獲標識された個体が翌年の1月に100km離れた和歌山県で回収されている。(和田2002)。このことからヒヨドリは漂鳥であるともいえる。

●ヒヨドリの渡り

山階(1934)によると北海道の個体のみ渡りをし、そのほかの地域では留鳥または漂鳥であるとされている。しかし、今日では、どうも状況が違うようである。

そこで、2004年の秋、全国にヒヨドリの渡りの観察情報の提供を呼びかけた。その結果、北海道から九州まで全国80ヶ所から情報が集まり、総観察群数は1,976群、総観察羽数は88,294羽におよんだ。例数の少なかった中国地方と九州地方を除き、8つの地域でヒヨドリの渡りが観察された。

ヒヨドリの秋の渡りは北から南への移動であることが分かっていたので、北海道などの北から南へ順に渡りが観察されると予想していた。ところが、実際は、関西などの南の地域で早くから渡りが始まり、北の地域に行くほど渡りの始まりが遅くなるという予想外の傾向が得られた(図3)。関西地域では9月9日に最初の渡りが観察され、11月8日まで3ヶ月間という長期にわたって観察された。一方、北海道では、10月10日に最初に観察され、11月2日が最後であった。

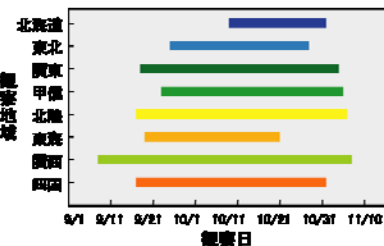


図3. 2004年秋の地域別のヒヨドリ渡り観察期間。(山口2005より)

南の地域で渡りが早く始まるということは、北から渡ってくる群が到達する前に、その地域の群が渡り始めることを示唆している。これは高標高地から低標高地への移動かもしれない。

2005年秋にも同様に情報を集めているが、現在のところ2004年に比べヒヨドリの渡りの開始が遅いようである。2005年秋は全国的に木の実が豊作であるという情報もあり、木の実との関係も興味深い。



写真5. 群れて渡るヒヨドリ。

●人間との関係

ヒヨドリは農作物に被害を与える主要な害鳥とされており、農林水産省の資料によると、2003年度の被害面積は4,400ha(鳥類の中では6位)、被害量は5,300t(同、2位)、被害金額は89,400万円(同、3位)であり、日本各地、特に果樹栽培地などで深刻な問題となっている。環境省によると、2000年度には有害鳥獣駆除で約34,000羽、狩猟で343,000羽ものヒヨドリが捕獲されている。

しかし、ヒヨドリは夏季に昆虫(害虫)を多く食べ、農業に貢献している面もある。被害の面のみを強調していると、大きな誤りを犯す可能性がある。日本にヒヨドリが何羽生息するのかさえ分からない現状ではあるが、生息地管理を含む個体数管理手法をとり入れ、人間とヒヨドリの共存を図らなくてはいけない時期が来ているのではないだろうか。

6. 引用・参考文献

榎本佳樹. 1941. 野鳥便覧(下). 日本野鳥の会大阪支部. 大阪.
 掃部康宏. 1995. ヒヨドリ *Hypsipetes amaurotis* の行動圏の解明. 卒業論文. 筑波大学.
 唐沢孝一. 1997. ヒヨドリ. 日本動物大百科4鳥類II. p. 83. 平凡社. 東京.
 斉藤安行. 2002. ヒヨドリの亜種は本当に区別できるのか? 野鳥 649: 15-17.
 田中智子. 2000. 成熟果実の分布に伴うヒヨドリ (*Hypsipetes amaurotis*) のテリトリーと行動圏の変化. 修士論文. 筑波大学.
 日本鳥学会. 2000. 日本産鳥類目録改訂第6版.
 羽田健三・小林建夫. 1967. ヒヨドリの生活史に関する研究. 山階鳥研報 27: 61-71.
 山口恭弘. 2004. ヒヨドリの全国移動と農作物被害. 農業技術 59: 173-178.
 山口恭弘. 2005. 渡りと木の実の豊凶から考えるヒヨドリの鳥害対策. 農林水産技術研究ジャーナル 28: 35-39.
 和田岳. 2002. 冬のヒヨドリの食べ物とくらし. 野鳥 649: 6-9.

執筆者

山口恭弘 中央農業総合研究センター 耕地環境部 鳥獣害研究室



ここはどこ?

ヒヨドリに関わり始めて6年になりました。調べれば調べるほど新たな発見と新たな謎が出てきます。謎のほうが多い...という話も。

もしかして「立ち入り禁止」の場所に入り込んでしまったのでしょうか...